あきらめたくない夢

北海道名寄産業高等学校 酪農科学科 3年 佐々木 翼

「将来、給料をきちんともらえる仕事の方が生活が安定するよ」

この言葉を私は高校一年生の時から進路の話をする度に、母から何度も何度も嫌になるほど聞かされました。私の実家は北海道の幌延町で酪農業を営んでおります。幼い頃から牛を見て育ってきました。私の両親はともに60歳を超え、酪農をするにしても長くて残り数年出来れば良い方だと言っていました。当然、私の将来は家業の酪農業を継いで、生活していく事だけを考えて、北海道名寄産業高校酪農科学科に入学しました。しかし、今年の春休みに行われた三者面談で母親の口から初めて、酪農をやめるという言葉を聞きました。その言葉を聞いて、現実として受け止める事ができず。三者面談で何を話したかも思い出せません。以前から、続けるかやめるかという話はしていたのですが、まさか、この場面で離農の話が現実の話になるとは、考えもしませんでした。今、思い返すとあの言葉を口にしていた時から母は離農することを考えていたのだと思います。一方で父は何も言いませんでしたが、どこか寂しくて、辛そうな表情を浮かべていました。きっと心のどこかでは、酪農をやってほしいという気持ちがあったのではないかと思います。

私の家の牧草畑は粘土質土壌ですぐに水がたまり、放牧地や牧草畑は傾斜が多く、肥料の流乏により、牧草の生育も斉一性がなく収穫期に思いどおりの収量を確保することが難しい土壌です。また、大型トラクターが入りづらい道もあり、私の父のように高齢化になると、労働負担も大きくなり離農するひとつの理由だと考えます。また、私が小学生のころ、牧場近くにあった川が年を追う毎にヘドロがたまり、川の水が汚れてしまったのです。それは牛の糞尿や堆肥が川に流れ込んでいたのが理由でした。当然、川下に暮らしている住民からの苦情が大きくなり、このような環境問題に対応した施設の改築を行うことが出来なく、そのことがあってから私の家では少しずつ離農する話が出てきていたのだと思います。今まで私は、このような場所で祖父が始めた酪農を父はよく跡を継ぎ、経営を続けてきたなといつも感心していました。長年、祖父と父が続けてきたこの仕事を将来、自分自身が継いでいくことについて、何も疑問を持つことはありませんでした。しかし、再三の母に「将来、給料をきちんともらえる仕事の方が生活が安定するよ」という言葉を投げかけられて、他の仕事にあっさり就職した方が良いのかと疑問を抱いたこともありました。私は、酪農以外の仕事をしたいわけではありません。むしろ跡を継ぎたいのです。しかし、両親が断腸の思いで決断したことです。残りの数年、父と母の仕事をサポートしたいと考えています。しかし、本音はとても残念です。やめてほしくなかったです。悔しいです。だから今後の人生を私がどのように考えて、どう生きていくかが大切なのだと考えています。この三者面談までは実家の跡継ぎとして大学へ進学し、

酪農の高度な知識や技術を手にしたいと考えていました。しかし、この進路計画の変更も余儀なくされ、私は、そこで将来どのような人生を歩みたいのか、どんな職業に就いて生活をしていきたいのか、深く考えました。考え抜いた末に、「どうしても酪農に関する職に就きたい！」。その中でも特に人工授精師の職に就きたいと考えるようになりました。当然、この職業は技術も知識も必要であり、簡単には取得できないのは理解しています。しかし、この資格を取得し、人工授精師として就職することによって、将来酪農を行う上で自分の手で種付けを行う事もできます。尚且つ様々な農家を見ることができると考え、この職に就きたいと考えるようになりました。

私は酪農をやりたい気持ちを捨てたわけではありません。将来、自分が本当にやりたい職業は酪農です。その夢を叶えるために私は、高校卒業後、人工授精師の資格や将来、新規就農を志している仲間が大勢いる専門学校へ進学したいと考えています。この夢も両親には強く反対されました。「酪農はそんなに甘いものではない」「夢だけで食ってはいけない」と強く言われ、自分の夢に対して、どうしてこんなにも否定されるのか、両親に対して怒りをぶつけることもありました。その時の父親の悲しそうな眼差しを見て、ハッと我に返りました。両親も本当は酪農を愛し、先祖から引き継いできたこの土地を守りながら、私に継いでいってもらいたいと考えていたと思います。しかし、年齢の問題や環境汚染に対する施設の更新ができずに、離農していかなければいけない状況になってしまいました。一番悔しいのは両親であって、自分と同じ思いをさせたくないという思いで「将来、給料をきちんともらえる仕事の方が生活が安定するよ」と言い続けてきたのだと思います。酪農業は、ＴＰＰの問題もあり将来的にも厳しさを増すことは想像できます。しかし、私は酪農業を将来の仕事として行っていきたいと考えています。何とか将来、お金を貯めこの土地で再度、酪農をできるようになれば、私は大規模化を行わずに自分の家族だけで酪農経営を行っていきたいと考えています。牛の頭数も５０頭から７０頭ぐらいを目標とし、コスト計算をきちんと行い、トラクターの台数も最低限にし、コントラクターを利用して粗飼料の生産を行っていきたいと考えています。これからの牛乳の価格は安さだけでは、海外の牛乳と比較しても勝負にはならないと考えています。少し値段は高くても、安心して飲んでもらえる牛乳を生産していかなければいけません。そのためには、北海道だからできる自給飼料の生産を行っていき、飼料も当然安全なものを生産していかなければいけません。そのためには生産土壌や牛の飲み水の管理も行い、そのことを消費者に知ってもらうためのＰＲ活動が必要不可欠だと思います。この消費者へのＰＲ活動がなければ、どんなに良い牛乳を生産しても海外の安い牛乳に日本の市場は飲み込まれてしまうと私は考えます。

こんな、私のどうしても酪農をしたい、という気持ちを両親は何とか理解をしてくれ、北海道農業専門学校への受験を許してくれました。無事合格することができたら、人工授精師の資格を取得し、将来、同じ夢や希望を持った仲間と共に切磋琢磨してしっかりと学んでいきたいと

考えています。そして、卒業後は牛の人工授精師の仕事を通じて、様々な酪農経営の方法や経営者の考え方、管理技術を見たり聞いたりしながら、将来の酪農経営に繋げていきたいと考えています。

もし、私の夢が叶えられれば両親も一緒に喜んでくれると信じています。

長年、私の身近にあった「酪農」。遠回りになるかもしれませんが、様々な仕事を知ることで、就農するまでにあった色々な体験や、学んだ知識と技術を生かした酪農をしたい。そしていつか、今まですごいと尊敬していた祖父や父を超える酪農家に私はなりたい。

母が言っていた「給料がもらえる仕事の方が生活が安定するよ」。確かにそうかもしれません。でも自分の人生なので、悔いだけは残したくありません。どんな人生が待っていようが、何回挫折をしようが、一つ一つ問題を突破できればきっと夢は叶えられる。これからもそう信じて、一歩一歩夢に向かって歩んでいきたいと思います。